



南信州の山城

飯田市美術博物館
飯田市上郷考古博物館

南信州の山城概観

1. 発達史

南信州には中世に築かれた170を超える城や館跡がある。その初源期の城については、残念ながら明らかではない。しかし、松川町大島城は平安時代末に船山城主片切行為の子片切宗綱が大島郷に分知され、築城したと伝えられており、少なくともいくつかの城については、鎌倉期には在地領主の居館としての城の姿があったと考えられる。

南信州の城は、県内他地域と同様、南北朝内乱期に発達する。南北朝の宗良親王とこれを受けた香坂高宗が大河原城にあり、大草城などの城に撃てて北朝側と戦った。同じく、宗良親王を支援し北朝側と戦った知久氏の本拠、知久平城主郭からは鎌倉時代末~室町時代の遺物が出土している。南信州では稀有の例である。

守護領国制の城は、松岡城・大沢城などがこの時期まで遡り得ると考えられる。

現在、目には南信州の山城の姿は多く戦国期で形作られる。おそらくそれまでに築かれた城の多くが政治・軍事情勢の不安定化の影響を受け、拡張を繰り返して次第に巨大化していくと考えられる。その第1の契機は小笠原氏(松尾・鈴岡・深志三氏)の抗争と応仁の乱の波及である。天正(元亀)2年には大島以南21郷の民百姓を徴用し大島城修築を行なうと、武田氏は遠城・坂田城などの修築を行い、上洛への準備を整えている。上野南本城においても重ね馬出に武田流築城術が指摘されるなど、この期に城が大きく変貌したことも見逃すことはできない。

やがて、織田氏の進攻と織田政権の確立、徳川幕府が出した1615(元和元)年の一国一城令によって、東日本的な土作りの城は姿を消し、飯田城が石積みの近世城郭へと変貌していく。

2. 立地

南信州の山城は、主に①段丘縁辺部に立地するもの、②残丘の微高地や尾根・丘陵の末端に立地するもの、③独立した山塊に立地するもの、④山の頂部や尾根の平坦部に立地するもの、に区分される。

このうち南信州の城跡を最も特徴付けるものは①で、天竜川沿いに展開する急峻な段丘とこれを深く開拓する支流群――こうした南信州の地形を巧みに利用した、いわゆる平山城である。船山城・大島城・松岡城・上野北本城・飯沼城・飯田城・松尾城・鈴岡城・知久平城などがこれに当たるに特に天竜(天竜川西岸)で発達している。

②は、城山城(吉田城)・原の城(今宮城・吉岡城など)である。①と同様、平山城に区分されるものの、水の手の確保に成功したであろう城の城・吉岡城などは、巨大な連郭式の城である。

③は神之峰城・久米ヶ城など比較的規模の大きなわゆる山城で、尾根を巧みに利用した網張が特徴的である。

④は大沢城・大河原城・駒場城・竜之沢城・権現城・満島城など、飯田盆地を取り巻く中央アルプス・西部山地・下条山脈・南部高地・伊那山脈および南アルプスの、山の頂部や鞍部などを利用している。

南信州の山城



